

本

講談社

読書人の雑誌

JULY 2013

7



平成25年7月1日発行(毎月1回1日発行 6月25日発売)第38巻第7号(通巻444号)

本

7月号—2013年●目次

カット——田村能里子／土井順子
表紙構成・本文デザイン—緒方修一

光と闇の激しいドラマのなかで
幻影のように浮かび上る「地霊」の化身

螺旋海岸 28 2012



志賀理江子 SHIGA Lieko

1980年 愛知県に生まれる
ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒業(ファインアート、ニューメディア専攻)
2007-08年 文化庁芸術家在外研修にてイギリスに滞在
2008年 第33回木村伊兵衛写真賞
2011年 個展「カナリア門 志賀理江子写真展」(三菱地所アルティウム／福岡)
個展「カナリア門」(ギャラリー・プリスカ・パスカー／ケルン、ドイツ)
2012年 個展「志賀理江子 螺旋海岸」(せんだいメディアテーク・ギャラリー4200、翌年まで開催)
2013年 「アーティスト・ファイル2013 現代の作家たち」展(国立新美術館／東京)に参加

あるようであり、なるようになる12

マスター・アーギュメント(1).....

入不二基義

火星に里帰り.....

伊与原新

自己愛と思いやりと社会.....

高哲男

——アダム・スミス『道徳感情論』.....

飯島裕一

うつ病の時代を生きる.....

町田康

洗濯／洗濯から恐慌へ.....

加藤征治

からだを流れるリンパのふしぎ.....

鎌田慧

それデモ私は行く.....

原武史

JR新宿駅9・10番線は何を意味するか.....

渡辺賢治

——村上春樹の新刊を読む.....

瀧井一博

古くて新しい漢方医学の魅力.....

高木徹

伊藤博文とUnited States.....

山口和幸

五輪開催というPR戦.....

丸谷英明

ツール・ド・フランス第100回大会に注目.....

池内紀

ウルトラマンもたいへんだ.....

高島俊男

無言の証言.....

高木凜

——『庶民のアルバム 明治・大正・昭和』.....

石田憲

中国の「ドーダ」——夏王朝・漢字・始皇帝.....

二宮清純

メモ魔・渡邊庄三郎の秘密.....

宮川敬之

リーダーが強ければ安心?.....

高階秀爾

「三年目の統一球」が失ったもの.....

高階秀爾

涙の理由.....

高階秀爾

現代アートの現場から91
変容する道元6
新日本野球紀行98

螺旋海岸28.....

高階秀爾

講談社出版案内...69

『本』年間予約購読のご案内...80

68 64 60 57 54 50 48 45 42 34 31 28 26 24 21 16 13 10 7 2

古くて新しい漢方医学の魅力



渡辺賢治

漢方医学、一度は明治政府が古臭いとして棄て去った医学であるが、近年再び脚光を浴びている。何故であろうか？ われわれは科学の進歩とともに人類が幸せになると信じてこの一〇〇年余り過してきた。しかし、実際にはどうであろうか。この一〇〇年、人類は物質的な豊かさは手に入れたかもしれない。ともすれば、物質的に豊かになることで、人間として進化したような錯覚にさえ陥るかもしれない。

一九九一年にイタリヤ・オーストリアの国境付近のアルプスの氷河から凍りづけになったミイラが発見された。これが五三〇〇年前の人体（アイスマン）だった。五三〇〇年前の人間はさぞかし原始的であろうと思われるが、さにあらず、である。すでに着衣も道具も今でも使えそうなものを揃えていた。死因も他殺であることが分かっており、嫉妬、闘争など現代人が有するものを當時の人たちも持っていたことが判明している。中でもわれわれ漢方を専門とする者を驚かせたのは、アイスマンには刺青があつて、そ

を、「董」がトリカブトを意味することを読み解いている（『東西生薬考』創元社）。東洋でもこの二つの猛毒がお互いに打ち消し合うことを知っていたことになる。この事実をどう解釈すべきであろう。洋の東西で偶然同じ発見がされたと考えるよりも、少なくとも二〇〇〇年前には西洋東洋の交流はすでに盛んにあつたと考える方が自然であろう。

人類の進化ということ話を戻すと、漢方医学の古典の一つである『黄帝内経』素問・靈樞は二〇〇〇年前に中国で書かれた本である。その中に「昔の人は一〇〇年生きたが、今の人たちは不摂生が過ぎて五〇年しか生きることができない」（上古天真論篇）という文章がある。江戸時代の平均寿命が五〇年もなかったことを考えると、今みたいな長寿を享受できるのは現代人の特権のように思っていたため、オーバーな表現だと感じた。しかし、聖書に書かれている人間の本质が今と全く変わらないことに思いを馳せる時、ここに書かれた一〇〇年という寿命はあり得ることかもしれない。科学が進歩した二一世紀に生きるわれわれが古代の人よりもすべてにおいて

れが正確に鍼灸のツボの位置を示していたことだ。われわれは鍼灸が中国発祥のものとして信じてきたが、その事実が大きく揺らぐような大発見であった。中国で発祥した治療法がヨーロッパに伝播した可能性もあるが、ひょっとしたらヨーロッパに起源をもつ鍼灸が東アジアに伝わっていったのかもしれない。記録がないので謎である。似たような例がある。サソリ毒とトリカブト毒がお互いに打ち消しあうということが一世紀の西洋で著されたプリニウスの『博物誌』とディオスコリデスの『ギリシャ本草』に記載されている。サソリ毒とトリカブト毒、この二つは言うまでもなく猛毒である。サソリ毒は説明するまでもないだろう。トリカブトは日本でも山野に普通に生えている植物の根であるが、クマを殺すために矢じりの先に塗られていたほどの猛毒である。しかしながら、この二つを混ぜると毒性が減弱するのである。まさに「毒をもって毒を制する」である。中国で紀元前二三九九年に成立したとされる『呂氏春秋』にも「萬毒不殺」という言葉が出てきて、大塚恭男が「萬」がサソリ

て優れているというのは尊大なる驕り高ぶった幻想であろう。そう考えると漢方を古臭い過去のものとして決めつけるのは早計であることに同意していただければだろうか。現在医療用漢方製剤として使われている処方は一四八あるが、その半数近くが後漢の末（紀元二〇〇年頃）に長沙の太守であった張仲景がそれまでの治療法をまとめたときれる『傷寒論』『金匱要略』を典とする薬である。日本の漢方医学はこの二書を重んじて発達してきた。

実際日進月歩の医学の世界にあって、漢方の専門家は一八〇〇年前の書物をバイブルのようにして読み込んでいます。何故そんな古い本を読むのか、と問われれば、答えは「現代でも立派に通用するから」ということになる。

有名な葛根湯も『傷寒論』に記載された処方であるが、今でも効果の高い風邪薬である。それが普遍的に効果があるのは、人間の性質が変わらないことに加えて、そこに書かれている処方が今でも再現できることにある。『傷寒論』には数多くの処方があるが、複数の生薬をある配合比で混ぜて、煎じるように指示がある。それはま

原稿募集

著者が何を求め、どうありたいと願っているか。それに耳をすませ、心を尽くして応えること。そのことを、いつも忘れない私たちがでありたいと思います。著者の想いに応えられる企業へ。東洋出版が存在する、ただひとつの意義であると、私たちは信じています。

出版をお考えの皆様へ
・自費出版をご希望で原稿をお持ちの方は編集部までお送りください。ジャンルは一切問いません。原稿受付後、ご提案書をお送りします。
・書籍は、全国書店配本し、無料で電子書籍化いたします。

東洋出版

〒112-0014 東京都文京区関口1-23-6
TEL: 03-5261-1004 FAX: 03-5261-1002
http://www.toyo-shuppan.com/

るで料理のレシピのようである。さらに「葛根湯」と名付けたことで、一つのアイデンティティが生まれる。すなわち現代の医師も一八〇〇年前の医師も「葛根湯」で同じような処方を目指せることができる。厳密には量の記載が現代とは異なるため、正確に配合比を再現できてはいないのかもしれないが、一八〇〇年の時を隔てても、同じような病に同じ薬を使って治しているかと思うと、時空を超えた不思議な感覚におそわれる。

しかし、伝統をそのままの形で受け入れて古いものに拘泥しているわけではない。現代社会に適應する形で変化を遂げている。古く新しいもの、それが漢方の魅力である。

たとえば大建中湯は今では腹部の手術の後に腸閉塞の予防のために外科領域で幅広く使われている。大建中湯は『金匱要略』には体が冷え切ったがために、嘔吐して食事をするのができない時のむ薬として記載されている（腹滿寒疝宿食病篇）。腸閉塞を思わせる記述であるが、もちろん一八〇〇年前には外科手術はないので、手術後にむなどということとはしなかった。まさに現代的な新しい使い方である。

同様のことは多々ある。半夏瀉心湯は『傷寒論』に記載されているお腹の薬であるが、今では抗がん剤による下痢を止めるために使われることがある。下痢のために抗がん剤が続けられなくて困っている人が、半夏瀉心湯の助けで抗がん剤が続けられることができ、がんも克服できることがあるのである。

小青龙湯は『傷寒論』では感染症の薬であるが、今では花粉症などのアレルギー性疾患に使われることが多い。

こうした工夫は現代医学の批判を浴びながら、それとつかず離れずで、漢方医学そのものが発展してきたたまたまものである。

冒頭「漢方医学は明治政府が棄て去った」と述べたが、一八八三年に布告された医師免許規則では漢方のみを専門とする医師の存続は断たれ、医師は全員西洋医学の教育を受けることが義務づけられた。中国、韓国などが伝統医学と西洋医学の二つの医師ライセンスを維持しているのに対し、日本の医療制度の中には「伝統医学」の医師ライセンスは存在しない。このことは今でも伝統医学振興政策が非常に弱いという短所はあるが、東西医療融合という意味においてはもっとも進んだ制度ともいえる。こうした東西医療の融合はいまだにどの国でも実現しておらず、人類史上類を見ない社会実験が行われていると言っても過言ではないかもしれない。

伝統を現代風に焼き直して新たな使い方を生み出すのはなにも漢方だけの話ではない。たとえばスカイツリーが法隆寺の五重塔を参照したことはよく知られている。一三〇〇年間地震等に耐え、倒壊しなかったのは心柱という建物の中央を貫くヒノキの太木が地震の揺れと反対方向に動くために、倒壊を防ぐことがわかり、それを近代建築に取り入れたのが、丸ビルやスカイツリーの制震構造である。

漢方医学もまさに現代の光を当てることによって日々変化を遂げているのである。古くて新しい医学、それがすなわち漢方医学である。その魅力について、このたび講談社選書メチエから『漢方医学』という本を上梓することになった。是非とも一読を賜れば幸いです。（わたなべ・けんじ 慶應義塾大学教授）

伊藤博文と United States



瀧井 一博

このたび講談社現代新書の一冊として刊行させていただいた拙著『明治国家をつくった人びと』（以下、本書）は、以前本誌でおこなっていた同名の連載（二〇〇八年八月号～二〇一一年六月号）を集めたものである。この場で刊行の報告をさせていただけることをまずは感謝したい。

この連載中、筆者は同時並行で『伊藤博文——知の政治家』と題する別の本の書き下ろし執筆にも追われていた。浅学非才の身には、いちどきに全く別のテーマでものを書くなど至難の業である。畢竟、本書は伊藤を中心とするさまざまな人間模様（明治天皇、木戸孝允、井上毅、大島圭介、山尾庸三など）を描くという側面を有することになった。本書に副題を添えるならば、「伊藤博文をめぐる人びと」とするのがふさわしいだろう。

かといって、本書は別著の執筆過程でこぼれ落ちたエピソードを拾い集めた研究余滴にとどまるものではない。本誌での連載を書き進めるなかで、そこで取り上げた人びとを通じて、伊藤博文の思わ

ぬ側面に気づかされることもあったからである。そのひとつとして、伊藤とアメリカ合衆国のつながりについて記しておきたい。

伊藤といえば、いまだに天皇大権主義の明治憲法の起草者ということで、ドイツ風君権論者のイメージで語られることがある。そのような俗説に対して、近時学界では彼が一貫してイギリス風の議会議主義的立憲君主制にシンパシーを抱いていたことが強調されている。そのようななか、筆者は伊藤のひとつの有力なモデル国としてアメリカ合衆国があったと考えている。

そのことに目を開かせてくれたのが、アメリカ彦蔵の名で知られるジョセフ・ヒコ（浜田彦蔵）に関する文献を読んでいた時である。本誌二〇〇九年一月月号に書いた話であるが、このアメリカ帰りの漂流民と伊藤は幕末の長崎で会っている。王政復古前夜の慶応三年（二八六七）六月、長崎で隠密活動をしていた木戸孝允と伊藤の二人が、同地に滞在していたヒコのことを聞き及び訪ねてきたのである。木戸と伊藤は、ヒコから海外事情、とりわけ英米の国の仕組み